

# ビワ生育情報

千葉県  
平成28年3月号

## 平成28年2月の気象

平成28年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第2半旬を除く5半旬で平年を上回った。月平均気温は7.7℃で、平年及び前年より1.3℃高かった。

氷点下を記録した日は第1～第4半旬でみられた。月合計は6日で、平年より約3日、前年より1日少なかった。最低極温は第6半旬を除く5半旬で平年並みか平年より高く、ビワ幼果が寒害を受ける-3℃以下を記録した日はなかった。

降水量は第3及び第4半旬を除く4半旬で平年を下回り、第1半旬では降雨がなかった。月合計は99mmで、平年の97%、前年の111%であった。

日照時間は第1、第3及び第5半旬で平年を下回った。月合計は150時間で、平年の99%、前年の90%であった。

表1 平成28年2月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	5.6	5.4	4.0	1	1.9	1	-0.2	-1.8	-0.3
2	5.6	6.3	4.6	2	1.7	2	-0.8	-1.3	-1.1
3	11.1	6.4	7.3	1	1.7	1	-0.2	-1.3	-1.2
4	7.9	5.9	5.2	2	1.5	2	-0.8	-0.8	-0.5
5	7.5	7.0	10.1	0	1.2	1	0.1	-0.5	-0.2
6	8.5	7.5	8.0	0	0.7	0	0.7	0.8	4.0
平均/計/最低値	7.7	6.4	6.4	6	8.7	7	-0.8	-2.8*	-1.2

※：過去30年間の最低極温の平均

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	0	13	8	22	29	29
2	2	16	29	32	28	24
3	13	11	0	17	27	46
4	71	25	11	33	26	30
5	6	21	17	21	26	20
6	8	16	24	24	16	18
合計	99	102	89	150	151	167

## 4月の作業（果実の発育は次ページ）

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。3月に続き、摘果・袋かけが重要な作業になる。

### 摘果・袋かけ

寒害を受けやすい園では、幼果の生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長いもの、果実肥大が均一でないもの、果皮に張りが無いものは被害果の可能性が高い。被害果の発生が多い園では、樹冠の外側の幼果は避け、被害が比較的少ない樹冠の内側の幼果を多く残すようにし、収量低下を抑える。

### がんしゅ病の予防

千葉県農作物病害虫雑草防除指針に従って、幼果期までに銅剤を予防散布する。その際、幹や枝にも薬液が十分にかかるようにする。

### 除草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草を済ませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

## 樹及び花房の発育

ビワの開花期は表2に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月2日で、平年より7日、前年より1日早かった。「大房」が11月14日で、平年より12日、前年より8日早かった。「田中」が11月4日で、平年より10日、前年より2日早かった。開花盛期は、「楠」が11月19日で、平年より10日、前年より1日早かった。「大房」が12月4日で、平年より17日、前年より7日早かった。「田中」が11月20日で、平年より16日早かったが、前年より3日遅かった。開花終期は、「楠」が12月6日で、平年より21日早かったが、前年より6日遅かった。「大房」が12月20日で、平年より41日、前年より19日早く、昭和57年からの観測史上最も早く開花が終わった。「田中」が12月11日で、平年より30日早かったが、前年より12日遅かった。

花房の出蕾が3品種共に平年より早く、11月、12月の気温が高かった影響で、3品種共に開花が平年より早く進み、1月には肥大した幼果も多くみられた。ビワの耐寒性は花より幼果の方が低いため、寒害を被りやすい状態にあったと考えられる。

表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 2	11. 9	11. 3	11. 19	11. 29	11. 20	12. 6	12. 27	11. 30
大 房	11. 14	11. 26	11. 22	12. 4	12. 21	12. 11	12. 20	1. 30	1. 8
田 中	11. 4	11. 14	11. 6	11. 20	12. 6	11. 17	12. 11	1. 10	11. 29

平年：昭和60年～平成26年の30年間の平均

3月1日時点のビワ幼果の生存率は表3に示した。樹冠外側の生存率は「楠」が19%、「大房」が55%、「田中」が47%であり、3品種共に平年及び前年より低かった。樹冠内側の生存率は「楠」が99%、「大房」が95%、「田中」が95%であり、3品種共に平年及び前年並みであった。樹冠外側は内側と比べて幼果の生存率が著しく低かった。樹内外の平均生存率は「楠」が59%、「大房」が75%、「田中」が71%であり、3品種共に平年及び前年より低かった。

暖地園芸研究所では、2月29日までに最低気温が $-3^{\circ}\text{C}$ 以下を記録した日が2日あった。本年度のビワは、3品種共に寒害を被りやすい状態にあり、実際に気温の低下が起こったことで、3品種共に寒害が多かったと考えられる。

花房内の幼果数は3品種共に平年より少ない。果実の肥大は平年より早く進んでいる。萌芽の展葉も平年より早く進んでいる。本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で多発年と同様の傾向を示すため、今後の発生予察情報を参考にする。また、カメムシの発生の多い園では、4月以降ビワ園への飛来に注意を要する。

表3 ビワ幼果の生存率（暖地園芸研究所）

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側(%)			内外の平均(%)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	19	68	100	99	93	99	59	79	100
大 房	55	83	97	95	95	97	75	88	97
田 中	47	84	98	95	96	95	71	90	96

調査日：平成28年3月1日

平年値：平成10年～平成27年の18年間の平均

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】  
 ※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。  
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>